

会社員が消える

－働き方の未来図－

大内伸哉 著

衝撃的なタイトルである。しかし、昨今の動向をみると、あながち大袈裟なタイトルとは思えなくなってきている。

働き方関連法案が成立し、働きやすい環境の整備が期待されている。学校教育においても多忙化する教員の業務の見直しと改善が進められている。

一方、少子高齢化に伴い生産年齢人口の減少が進み、恒常的な労働力不足が課題となっている。その解決に当たっては、「一億総活躍社会」を旗印に、女性、高齢者、外国人などの雇用の拡大が図られようとしている。

このような中、「2011年度のアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」、「今後10～20年程度で約47%の仕事が自動化される可能性が高い」、「日本の労働力人口の49%が人工知能(AI)やロボット等で代替可能になる」といった将来の産業構造・就業構造の変化の予測が話題となっている。

平成28年1月に閣議決定された第5期科学技術基本計画では、我が国が目指すべき未来社会の姿としてSociety 5.0が提唱された。

Society 5.0が目指す社会は、IoTですべての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値が生み出される社会、人工知能(AI)により、必要な情報が必要な時に提供される社会、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの困難を克服する社会である。人間の労働がAIやロボットにとって替わられる時代の到来が予見される。

このような社会の変化の中で、本書は、働き

方の未来を予測している。

終身雇用、年功型賃金、ジェネラリストとして一括採用して企業内でOJTにより職能を高めるというこれまでの日本型雇用システムは、今後大きく変化し、企業に雇用や賃金の安定を依存しないで、自らの専門性を高め自分の力で職業人生を切り開いていかなければならない時代が到来するとしている。企業中心社会から個人中心社会への変化である。

そして、未来の働き方として、ICTを活用して場所や時間にとらわれない柔軟な働き方をするテレワーカー、ネットを通して業務を受注するクラウドワーカー、単発で仕事を請け負うギグワーカーなどといった新たな仕事のスタイルが生まれ、働き方が多様化してくることを予測している。

また、今後、多くの業務において、そのスキルが可視化・定型化され、AIやロボットに代替されることが予想され、人間に残された仕事は、創造性、協調性、非定型性の要素をもったものが中心となる。

とりわけ創造性や独創性が重要である。創造性を身に付けるためには、問題意識をもって常識を疑うことである。制度、組織、規範、ルールなどの人間が作り出した常識を疑うことが新たな発想を生み出すこととなるとしている。

本書の終盤では、こうした時代に必要な学びの在り方について述べている。

職業活動に必要な知識・技術のかなりの部分は、AIやロボットによって陳腐化していくことが予想される。こうした中で、自ら学ぶという主体的な姿勢、受け身ではなく自ら考えようとする学び方など学ぶ側の意識の変革が必要であるとしている。また、科学、技術、工学、数学に芸術を加えたSTEAMの教育が「現在のリベラルアーツ」として重要であるとしている。

(文春新書, 239頁, 880円+税) (巽公一)